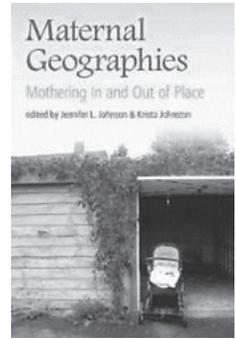


## ◆書評◆

Jennifer L. Johnson/Krista Johnston 編

*Maternal Geographies**Mothering In and Out of Place*

(Demeter Press 2019年 ISBN 978-1-77258-200-0 \$34.95)



福田 珠己

(大阪府立大学 人間社会システム科学研究科)

私たちが日常生活の中で行う行為は、ある空間において行われている。そのことは、「母であること」についての行為・存在についても同様である。本書 *Maternal Geographies: Mothering In and Out of Place* (「母であること」の地理：場所に合った／場所からはずれた母という行為) が問うのはそのことである。「母であること」の行為・存在について、空間的な側面から、そして空間的地理的な差異を決して等閑視することなく問うているのである。

母とは常に女性なのか。すべての女性が潜在的に母なのか。そして、ホームやケア・ワークが行われるような場所にいることによって、母という、そして、女性というアイデンティティを同時に強いられることになるのか。編者 Jennifer L. Johnson と Krista Johnston はこのようなシンプルな、しかし、同時に深い疑問を読者に投げかける。「母であること」は空間や場所の形成にどのような影響を与えているのか、また、空間や場所

を通して「母であること」はどのように形成されているのか。本書では、フェミニスト地理学、女性学、ジェンダー・スタディーズ、セクシュアリティ・スタディーズ、人類学、美術・詩・映画に関する研究・実践といった学際的な視点から、地理的に異なる事例を積み重ねることによって、この疑問に応答している。

Johnson と Johnston が指摘するように、マザーフード・スタディーズとフェミニスト地理学双方において豊かな研究蓄積があるにもかかわらず、両者が関係しあうことはほとんどなかったことを考えると、本書で共有されている課題の持つ意義は大きい。読者は、各章で展開される研究・実践を通して、「母であること」の地理、すなわち、特定の場所で「母であること」が制度化され押し付けられ称揚されていることを明らかにするだけでなく、「母」とよばれる個々の主体を地図化するプロセスにも出会う。「母であること」の地理とは決して静的

な固定化されたものではない。社会的アイデンティティや抑圧のシステムが交差するものであり、関係しあうものであり、常に変化するものとして、解き明かされる。

Johnson と Johnston による思想的基盤の検討に続くのは、15 の個性ある事例に即した論考であり、それらは3部に分けられている。1部では、子供のための空間を作り出すこととホームにおける身体化された経験がテーマとなる。Minako Kuramitsu (倉光ミナ子) は母としての実践を通して、また、空間を超えた共同体との関係を通して、日本に住むサモア人妻がホームを形成していくことについて、物質的な側面にも注目しながら考察する。Wanda Campbell が取り上げるのは、カナダの芸術家 Alex Colville の絵画作品 *May* である。作品に呼応するかのように、視覚的な表現を言葉でより吟味するかのように、Campbell が自らの詩作によって空間と場所におけるマザリングについて熟考する。Laurel O'Gorman は北東オンタリオにおける民族誌的調査をもとに、低所得のシングルマザーが子供たちの遊ぶ空間を求めてどのように折り合いをつけているのか、また、健康や肥満、社会的規範、リスクや安全についての理解が遊び場の選択や利用をどのように規制しているか考察している。Karen Falconer Al-Hindi が注目するのは、生物医学的治療にかかわる自閉症児の母親である。母として行為、治癒を求める旅路は、新たな物理的、隠喩的で仮想的な空間を生み出し、地下茎のように広

がるコミュニティを維持しているのだという。Elizabeth Philips が GPS を利用したパフォーマンス・ウォーキング・プロジェクトの実践について詳述する。刺繍のような作品は、「母であること」が地図化されていく風景を描き出す。

2部でテーマとして取り上げられるのは、妊娠と「母であること」、研究活動や職場との関係性である。Tracy Gregory と Jennifer L. Johnson が北オンタリオのストリップ産業で働く女性を対象とした民族誌的研究から明らかにするのは、ストリッパーとしての労働と母であることの分離である。Jules Arita Koostachin は、出産に関わるクリーの文化・伝統に焦点をあてたドキュメンタリー *PLACEnta* を製作し、それについて論じる。Danielle Drozdowski と Natascha Klocker は良き母と良き労働者の二分法に迫る。オーストラリアにおける調査結果から、職場における妊婦の身体に注目し、「母であること」がいかに関制されているか考察している。Shana Calixte は妊婦で黒人であるフィールドワーカーとしての経験から、調査地において身体が解釈され位置づけられる複雑さについて指摘する。Emma Sharp は前章の Calixte 同様、妊婦である調査者の経験に基づくもので、自らの身体を介して、アオテアロア／ニュージーランドにおいて食に関する参与観察を展開する。

3部では、母であることその身体的な行為が監視や規制の場であることが問われる。Carolyn Fraker は貧困有色女性を対

象としたニューヨーク市のプロジェクト Opportunity NYC を例に、それを介して母としての行為のステレオタイプ化が促進されることを論じる。Nadia Der-Ohannessian は2本のアルゼンチン映画 *Lengua Materna* と *Soleada* に登場する母親に注目し、家庭空間が不安定化される母親の経験と、それを経てホーム概念が解き放たれることについて読み解いていく。Nathalie Reis Itaboraí は貧困家庭を対象としたブラジル政府の Bolsa Família 計画を例に、世帯における女性の権限を強める一方、母としてのアイデンティティを強化し「母であること」から離れた女性の経済的人格的自律を阻害しているという相反する評価について詳細に検討する。Laurence Simard-Gagnon が論じるのは、英語系住民が多数を占めるカナダ・キングストンにおけるフランス語系女性の母としてのアンビバレントな経験である。Catharine Nash、Andrew Gorman-Murray、Kath Browne はカナダ、オーストラリア、アイルランドにおける同性婚に対する抵抗について調査し、異性愛至上主義の運動家による「母親がいない子供」言説がいかなるものか考察する。

各章は比較的短く、総括する章も設けられていないため、読後に物足りなさを感じることもあるかもしれない。しかしながら、3部に分けて巧みに配列された小品というべき15の章はいずれも魅力的なものであ

り、読者自身がそれらを関連付けたり、身体的な、あるいは、地理的な自らの経験と重ねあわせたりして、さらなる探求へと歩みだすこともできる。それは、本書が外部から与えられた「母であること」の固定化された位置づけの解釈に留まることなく、母である個々の存在や身体に主眼をおいて、母としての旅路を描き出していることと無関係ではない。このような視点は、2000年前後からフェミニスト地理学を中心として展開されるようになったホームの地理的研究<sup>1</sup>とも共通するものである。それら地理的研究において、ホームは、公的なるもの、私的なるものの双方を通して構成される交差する領域として、抑圧だけでなく抵抗の場として、多様な生きられた経験として、流動的なものとして、物質的であると同時に想像的なものとして、位置づけられ研究されている。

さらに、本書に収められた研究の多くは、自らの身体やポジショナリティを棚上げすることなく、対象と向かい合い、「母であること」の地理の探求を行っている。10章で Calixte が述べているように、身体を中立化することによって研究者は、研究対象から距離を置くことができ、そのことにより、対象や知に対する権力を獲得する。執筆者の多くは、それとは別のやり方で、「母ということ」の地理に向き合い、研究論文にとどまらない多様な様式で表現している。それが本書の魅力である。

1 Blunt, A. and Dowling, R. *Home (Key Ideas in Geography)*. Routledge, 2006.